

## 「草枕と着物研究会」シンポジウム開催

草枕ファン倶楽部総会にて今年度は「草枕と着物研究会」と称し、着物エディターの安達絵里子氏を迎えてシンポジウムを開催しました。草枕交流館句会講師の田島先生と村田草枕交流館長を交え、「草枕」に描かれた着物と漱石の着物好みに観点を置きトークいただきました。



A woman in a black kimono is standing and speaking into a microphone, pointing her right index finger upwards. She is positioned behind a desk. In the foreground, a man in a black jacket is seated, facing away from the camera, looking at a computer monitor. The monitor displays a blue screen with some text. The room has light-colored wooden walls and a dark curtain on the left.



小説「草枕」に描かれる着物—漱石の着物好み—

# 漱石来熊 130 年—漱石記念年に寄せて

草枕交流館長  
村田 由美



来年、2026年は漱石来熊130年という記念年にあたる。翌年は、生誕160周年と、記念年が続く。

玉名に関していえば、『草枕』（1906）発表されてから120年、漱石が小天に来たのが1897年から98年にかけてだから2027年28年もまた漱石記念の年となる。

漱石記念年として、熊本で大きなイベントが始まったのは1996年の「漱石来熊100年」だろう。わずか1年の滞在にもかかわらず「坊っちゃん」で全国的な知名度を誇る松山に大きく水をあけられている熊本をなんとか全国に向けて発信したいという思いがあった。熊本大学の首藤基澄先生、中村青史先生を中心として熊本近代文学研究会での共同研究もその前年から始まり、「熊本日日新聞」でも特集記事が組まれ、県下のさまざまな企業も協賛し、いろいろなイベントが催された。

研究会誌『方位』でも「熊本の漱石」が特集され、新資料や研究が掲載された。熊本日日新聞社編の『漱石の四年三カ月』は、熊本ならではの新たな漱石像がうかがわれる質の高い報告書となった。

それから30年、研究会ではその後の新たな研究成果を踏まえて今年2月『漱石の熊本研究年表』を発刊した。

しかし、この30年で「熊本の漱石」が正しく知られるようになったかということ、相変わらず心もとない。さすがに「引っ越し魔」という文字は見かけなくなったが、漱石が熊本で、嫌々教師生活を送っていたと思っている人は少なくない。「とにかくやめた気は教師。やりたきは創作」（明38・9・17高浜虚子宛）というフレーズがあまりにも有名なためだろう。これは、漱石が「創作」と

いう手段を手に入れてからのことで、漱石自身が教師に向いていないと思っていたとしても、それをそのまま五高教師の漱石に当てはめるわけにはいかない。

熊本時代の漱石は、その教員生活の中でも唯一、非常勤ではなく、正規の教官として官位を得ていた。給料は松山時代よりもさらに高額で年俸1200円。英国留学後、東京で職を求めた漱石が、第一高等学校が年俸700円だったため、東京帝国大学や明治大学を兼任しなければならなかったことを考えると熊本時代は最も安定した時代だったことがわかる。実父の死後は、実家への送金がなくなったので書生を置いて苦学生を援助した。『猫』に登場する俣野義郎もその1人である。熊本での最後の書生であった湯浅孫三郎は、「生徒に怖がられた半面には、又実に痛快で親しみのある人」（「乞食の詩が縁」）と述べている。書生たちは、生涯漱石との関わりを持った。漱石に憧れて帝国大学の英文学科へ入学した生徒もいた。立派な英語教師だったのだ。

熊本時代の漱石は無論、作家の片鱗も見せていない。それに対して俳句を約1000句も残し、それが生涯で作った俳句の4割であることから、熊本での漱石が「俳人」としての意味が大きいと指摘する人もいる。しかし、松山時代の作句は一年で700句を超えている。俳句熱は松山時代ほどではない。むしろ、漱石が俳句を作ることを知って、指導を仰ぎたいとやってきた生徒たちによって俳句を作る情熱を持続させた。漱石を師とする俳句結社「紫溟吟社」の存在は大きい。その中心となったのは、寺田寅彦ではなく、厨川肇（千江）と蒲生栄（紫川）の2人である。世間ではどうしても著名人の方を中心人物と考えがちだ。 ↗

漱石は熊本で結婚し、父にもなった。その家庭生活は『道草』から連想されるような不穏なものではない。『漱石の思い出』で鏡子は、1年くらいは「下町風」の漱石の気質が飲み込めなかったけれど、「それ（父）に比べると夏目はゆったりしていて、すべてのことについて公平」で「なるほど先生などというものは修養のできたもの」と感心していたと語っている。そこに描かれているのは対等にものを言い合う夫婦像である。

本年3月「くまもと漱石文化振興会」主催の記念

年「キックオフシンポジウム」で漱石作品を愛読する学生たちがいることを知り、頼もしく思った。しかし、だれも漱石旧居を訪れたことがないということにも驚いた。熊本は、唯一漱石が住んだ旧居が残っている土地である。県内にいくつもあるとありがたみを感じないのかもしれないが、まずは、旧居近くの小学校などで旧居を訪問し、漱石が熊本にいたことを実感してもらえれば「漱石と熊本」の裾野も広がるのかもしれない。

2025年6月1日  
講演されました

## 玉名市文化協会 合併創立 20 周年記念祭開催

### 文化講演 明治の文豪「夏目漱石と玉名」

玉名市文化協会が今年、発足から 20 年を迎えて、旧玉名市と岱明、横島、天水の各町の合併に伴い発足。毎年の文化祭などを通して音楽や文芸、美術といった分野の活動を支援してきた。5月31日と6月1日に市民会館で記念祭が開かれました。記念祭は、31日に会員のステージ上演や作品展示、1日は記念式典と草枕交流館の村田由美館長による講演が行われました。（以下要約）



草枕交流館長 村田由美

漱石が熊本に来てからやがて 130 年。来熊の翌年には小天に逗留し、その後この時の経験を元に『草枕』という作品を書いた。この作品は、帝国大学の先生だった漱石を職業作家へと導く転機となる。そして、漱石が作家となるに当たって、玉名出身の人物が大きな影響を与えたのだ。その人物との出会いが無ければ、文豪漱石は生まれなかったかも知れない。それが明治期に玉名市横島町で私塾を開いた池辺吉十郎の長男で、東京朝日新聞主筆の池辺三山（吉太郎）。

父吉十郎は、西南戦争で薩軍熊本隊隊長として参加、官軍に捕らえられて長崎で刑死した。三山（吉太郎）と母は、戦争時前田案山子にかくまわれていた。三山は、上京後苦学の末、旧藩主細川護久の懇望により護成のパリ留学に随行。その時、鉄崑崙（てつこんろん）の名で『日本』に連載した「巴里通信」は評判となり漱石はその愛読者だった。帰国後三山は、大阪朝日新聞の主筆となる。その後、東京朝日新聞の主筆となった三山は明治40年、五高時代の教え子白仁三郎を交渉に当たらせ、漱石に入社をすすめた。三山と漱石が直接会うに至り、漱石は三山の人柄に触れ入社を決意するに至った。三山の存在があって漱石の職業作家の道が開いたと言える。（村田由美）



玉名市民会館大ホールにて

## 2024 年 9 月～ 草枕ガイドの会が発足しました！

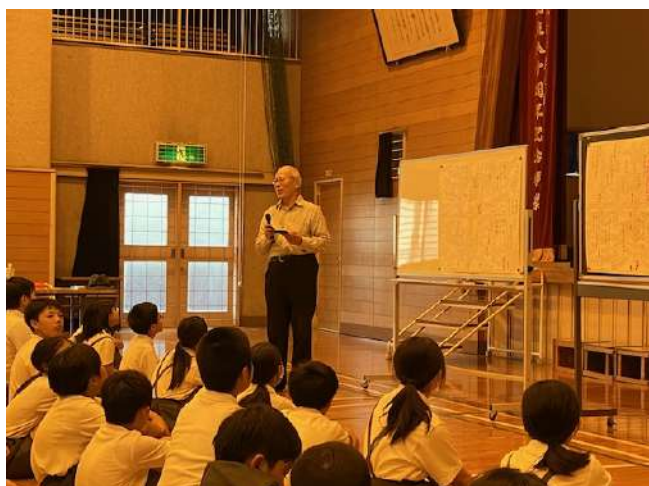
2024 年 9 月から草枕ガイドの会を開催しています。このガイドの会は、地域の歴史や資源について勉強会を行い、草枕交流館の来館者や草枕体験ウォークでのガイドの充実を図るためのものです。2 か月に 1 回程度で、地域の歴史に詳しい方に講師をお願いし、会のメンバーと情報共有を行っています。

- ・ 第 1 回テーマ：干拓（R6/9/28 実施）  
加藤清正の治水から前田案山子の免田
- ・ 第 2 回テーマ：前田ツチ（R6/11/16 実施）  
前田案山子 3 女 宮崎滔天の妻
- ・ 第 3 回テーマ：金森通倫（R7/2/1 実施）  
第 102 代内閣総理大臣 石破茂の曾祖父
- ・ 第 4 回テーマ：竹崎季長（R7/4/19 実施）  
出自は天水町竹崎？
- ・ 第 5 回テーマ：田尻家（R7/7/19 予定）  
前田家のルーツ



## 2024 年 10 月 28 日 小天小学校「草枕の里俳句発表会」開催

昨年从小天小学校と草枕交流館共催で開催しています。今年度は小天小学校体育館で 4 年生から 6 年生 55 人が参加しました。事前に俳句を詠んで子供たちが選句をし、作句した児童にどういう気持ちで詠んだか発表してもらいました。草枕句会の講師で俳人の田島三間先生・句会メンバーによる選句、先生からの講評などの俳句発表会となりました。



# 俳句フォト夏目漱石の旅2024（9期）開催

☆第9期の作品は、前期8/31締切で募集、358点（創作部門94点、課題部門257点、高校生の部7点）の応募がありました。後期2/29締切で、424点（創作部門94点、課題部門315点、高校生の部15点）の応募がありました。前期・後期の作品の中から夏の創作部門の中立喜広さんの作品が草枕大賞（年間最優秀賞）に選ばれました。

☆副賞は、小天温泉那古井館のペア宿泊券（同館提供）



第9回 草枕大賞(年間最優秀賞) 中立喜広様



令和7年度草枕ファン倶楽部総会において、入賞者の表彰式が行われました。

### 課題部門入賞者

[illegible]

## FINAL 作品募集

## 第10回（2025年度）

課題部門は、過去の全課題が対象  
次の記念年から新たな展開準備中！

|        |          |
|--------|----------|
| ◇2026年 | 漱石来熊130年 |
| ◇2027年 | 草枕の旅130年 |

☆こちらのホームページで全応募作品を公開中

<http://www.kusamakura.jp> 「漱石・草枕の里」 「俳句フォト夏目漱石の旅」

# 草枕ファン倶楽部 2025 年度事業計画

## ●会員活動

### ◎総会・記念講演会（5月）

5月24日（土）草枕交流館（実施済み）

シンポジウム「草枕・着物研究会」

（パネラー / 安達絵里子氏・田島三間氏・村田由美館長）

### ◎小天小俳句ウォークラリー（3回目）

10月に実施予定。子供達が「草枕の里」で俳句を詠む。小天小と交流館の共催。

### ◎草枕句会（毎月第2日曜日午後）

毎月第2日曜日午後（原則）通年実施。

田島三間先生を講師として定期活動を継続。

「草心流」中尾氏による野の花の生け花が句会の場を毎回彩った。

### ◎「草枕」史跡保存ボランティア清掃活動

年2回実施

春（4月）の清掃：（4/26に実施済み）

秋（10月）の清掃：（期日は後日ご案内）

### ◎ガイドの会

2か月に1回開催予定。土曜日午後2時～（原則）通年実施。

## ●一般参加および公募事業

### ◎草枕の旅 体験ウォーク（2025年度は2回の実施）

文化の日（11/3）春分の日（3/20）

### ◎俳句フォト夏目漱石の旅（10期目の公募）

ファイナル（11期は漱石来熊130年記念事業として新企画を予定）

高校生部門継続。再び年2回の締切（8/31、2/28）で春夏期と

秋冬期を対象。

課題部門も季ごとに10題設定しすべてに1句投句可とする。

## ●その他

### ◎交流展

☆玉名市・新宿区の協働展

「俳句フォト夏目漱石の旅」展 漱石山房記念館（11月予定）

### ◎玉名市民文化祭 5月31日（土）・6月1日（日）玉名市民会館

6月1日（日）村田館長が講演者として参加

### ◎熊本県民カレッジ「パレアミュージアム」

村田館長が講演者として参加（1回）

### ◎「春星」22号の発行（本紙）

## ご寄付ご寄贈のお礼《2024 年度》

### 《書籍》

『夏目漱石解体全書 増補版』（香日ゆら著）

河出書房新社様

『漱石の名作に恋して』（江上信行著） 江上信行様

『漱石で学ぶ』 村山漱石の会様

『漱石の足跡を尋ねて』 村山漱石の会様

『温泉文学史序説』（岡村民夫著） 岡村民夫様

『機雷』（光岡 明著） 小山芳弘様

『草枕』の那美と辛亥革命（安住恭子著） 小山芳弘様

『俳句界』2025.2月号（文学の森） 永田満徳様

俳誌『火神』82号（令和6年秋冬号） 永田満徳様

俳誌『火神』81号（令和6年夏号） 永田満徳様

『ふるさと文化財探訪改訂版』（玉名市教育委員会） 山 秀則様

『ふるさと文化財探訪マップ』（玉名市教育委員会） 山 秀則様

総合文化詩『KUMAMOTO No.47』（くまもと文化振興会） 辻 泰明様

『鶉籠 虞美人草』（夏目漱石・作） 村田由美様（以下同様）

『三四郎 それから 門』（夏目漱石・作）

『彼岸過迄 四篇』（夏目漱石・作）

『文学論』（夏目漱石・作）

『熊本の植物 - 熊本の風土とところ - ①』

（熊本記念植物採集会著） 森下 修様（以下同様）

『玉（杵）名からのメッセージ 南大門物語』（末吉駿一著）

『夏目漱石東洋と西洋の狭間で』（高 継芬編著）

『柳川文芸 ほりわり』（江平 信著） 他



「草枕」史跡保存ボランティア作業



「草枕の旅」体験ウォーク

漱石山房記念館「俳句フォト夏目漱石の旅」